

【08年 丹沢山塊 ふれあい秋のタカ渡り調査】

会員番号134 横浜市：竹内 勝夫

小生の住む旭区・若葉台の団地から、朝に夕に眺める丹沢山塊。左に端正な大山から右に三峰山、その先の峰々辺りまでの山々が遠望できる。残念だが表尾根は無理である。

果たしてこの山波を秋のタカの渡りは越えてゆくのだろうか？ふれあい・池上さん提案のタカの渡り調査に参加し、丹沢山塊越えの渡り確認のため今年も通ってみました。

過去の調査から矢倉岳から万葉峠を越す渡りの集団は、この神奈川県内の何処を通過しているのか？この秦野盆地から丹沢山塊の何処を越えているのだろうか？その疑問に挑戦したのです。

観察の時には5時に起床、6時には出発し、7時から菜の花台で観察である。早朝は、小鳥達が我々を楽しませてくれました。双眼鏡を肩に、コンビニのおにぎりを頬張りながら、秦野盆地・湘南の海岸線・相模湾に浮かぶ朝日を受けた江ノ島も格別でした。

少し双眼鏡を引くと、秦野盆地が海のように、そこに半島のように突き出た権現山から弘法山がやはり日を受けて輝き見えています。

この時間耳を傾けると聞こえるのは、シジュウカラ/メジロ/ホオジロ/モズ/イカル/カケス、そして少し気温が上がると、飛ぶために生まれてきたようなアマツバメ/ヒメアマツバメ/イワツバメ/ツバメ達です。山頂をかすめながら羽音を残し去っていきます。

その間をぬって、オオルリやヒタキ類も梢で休息を取りながら西を目指します。でも何時も感じますが、何故小鳥達の体型はこの様に多様に進化したのでしょうか？同じように海を渡り南の越冬地を目指すには、余りにも飛ぶことに対する体型が違うからです。餌の取り方での進化と思いますが、その過程での変化には興味には尽きないものが有りますね。

小鳥達を観ている間に時間も経ち、気温も上昇し始めると、猛禽類が活動を始めます。何時も先陣を切るのがトビです。菜の花台のケースでは殆どが秦野盆地側から突然姿を表します。ワッとさせられますがトビですねで終わってしまう。(トビには失礼だが)。

次は一通り近隣に立ち並ぶ高圧送電線の鉄塔上部をチェックする。時折羽を休めているタカ類が観察されることがある。彼らにとっては休息やハンティングの良いポイントであるのだろうか。

そして双眼鏡焦点を権現山に合わせる。そこから順次弘法山、善波峠、そして浅間尾根を大山方面へと移してゆきます。地付きのオオタカやノスリが舞うが、大きい群れの渡りには巡り合わないことが殆どである。

ある日のこと権現山でセンサス調査をしていた仲間の方から、大山山頂遙か上空を飛ぶ群れの情報が観察途中に入ってきた。急ぎ双眼鏡を大山上空に向けると、居たではありませんか！ ヤッターと声が出ました。

肉眼では見えないが上空を飛行するサシバの群れが、レンズを通して確認出来ます。なんとサシバは丹沢山塊の上を飛び越えていたのです。

今まで見えなかったサシバ達は遠くで上昇気流に乗り、水平飛行に移り、高度が落ちたら再び上昇気流に乗り西を目指していたのです。矢倉岳でも気流に乗りその先の箱根を超えていたのでしょうか。この瞬間に、我々の調査にも一筋の光が射したと嬉しく、楽しく感じ入りました。

大山やその付近の山々の稜線よりも、はるかに高い空をすでに滑空し越冬地を目指していたと感じま

した。渡りの群れは面白いように次から次と大山の上を飛んで行きます。

9月27日の午後、権現山で飛んだ集団も、遠い水平方向に気を取られていた我々の視野より高く飛来し、忽然と姿を現し、気づいた時には権現山山頂の少し北を悠然と飛び、あれよあれよと言う間に、一直線に矢倉岳方面へと去りました。

今後の観測結果を待たねばならないが、これらの経験や各種の文献から、関東平野ではサシバがと飛ぶ日は一斉で、遠くで上昇気流に乗り、降下・上昇を繰り返しながら一気に飛び抜けるように、その日の内に渡りきってしまうと、この度の観察からは感じました。

こんな観察や感想で今シーズンの“ふれあいタカ渡り調査”は10月中旬、来期も又の合い言葉で終わりました。数は減ったものの、未だツバメ達が西へと軽やかに菜の花台をかすめ飛び去っている日でした。

今シーズンの観察は完了ですが、調査は未だスタートしたばかりです。場所やルートを確定し渡りの実態を掴むまで継続します。

それにはふれあい皆さまの数多い観察の目が必要です。次のシーズンには誘い合って、渡りのタカを多くの会員で観察・調査が出来る年になればと願いつつ・・・有り難うございました。